

芥川龍之介

漱石山房の冬



漱石山房の冬

わたしは年少のW君と、旧友のMに案内されながら、
久しぶりに先生の書齋へはいった。

書齋は此処へ建て直った後、すっかり日当りが悪くな
った。それから支那の五羽鶴の毯たんも何時の間にか大分色
がさめた。最後にもとの茶の間との境、更紗さらさの唐紙からかみのあ
った所も、今は先生の写真のある仏壇に形を変えていた。
しかしその外は不相変である。洋書をつまんだ書棚も
ある。「無絃琴むげんきん」の額もある。先生が毎日原稿を書いた、
小さい紫檀したんの机もある。瓦斯ガス煖炉だんろもある。屏風もある。

縁の外には芭蕉もある。芭蕉の軒を払った葉うらに、大きい花さえ腐らせている。銅印もある。瀬戸の火鉢もある。天井には鼠の食い破った穴も、……

わたしは天井を見上げながら、独り言のように云った。

「天井は張り換えなかったのかな。」

「張り換えたんだがね。鼠のやつにはかなわないよ。」
Mは元気そうに笑っていた。

十一月の或夜である。この書齋に客が三人あった。客の一人はO君である。O君は綿拔瓢わたぬきひょういちろう一郎と云う筆名の

ある大学生であった。あとの二人も大学生である。しかしこれはO君が今夜先生に紹介したのである。その一人は袴をはき、他の一人は制服を着ている。先生はこの三人の客にこんなことを話していた。「自分はまだ生涯に三度しか万歳を唱えたことはない。最初は、……二度目は、……三度目は、……」制服を着た大学生は膝の辺りの寒い為に、始終ぶるぶる震えていた。

それが当時のわたしだった。もう一人の大学生、――袴をはいたのはKである。Kは或事件の為に、先生の歿後来ないようになった。同時に又旧友のMとも絶交の形

になつてしまつた。これは世間も周知のことであろう。

又十月の或夜である。わたしはひとりこの書齋に、先生と膝をつき合せていた。話題はわたしの身の上だつた。文を売つて口を餉こするのも好い。しかし買う方は商売である。それを一々註文通り、引き受けてはたまるものではない。貧の為ならば兎に角も、慎むべきものは濫作である。先生はそんな話をした後、「君はまだ年が若いから、そう云う危険などは考えていまい。それを僕が君の代りに考えて見るとすればだね」と云つた。わたしは今でもその時の先生の微笑を覚えている。いや、暗い

軒先の芭蕉の戦そよぎも覚えていゝる。しかし先生の訓戒には忠だつたと云い切る自信を持たない。

更に又十二月の或夜である。わたしはやはりこの書齋に瓦斯煖炉の火を守つていた。わたしと一しよに坐つていたのは先生の奥さんとMとである。先生はもう物故していた。Mとわたしとは奥さんにいろいろ先生の話を聞いた。先生はあの小さい机に原稿のペンを動かしながら、床板を洩れる風の為に悩まされたと云うことである。しかし先生は傲語ごうごしていた。「京都あたりの茶人の家と比べて見給え。天井は穴だらけになっているが、兎に角僕

の書齋は雄大だからね。」穴は今でも明いた儘である。先生の歿後七年の今でも……

その時若いW君の言葉はわたしの追憶を打ち破った。

「和本は虫が食いはしませんか？」

「食いますよ。そいつにも弱っているんです。」

Mは高い書棚の前へW君を案内した。

* * *

三十分の後、わたしは埃風に吹かれながら、W君と町を歩いていた。

「あの書齋は冬は寒かったでしょうね。」

W君は太い杖を振り振り、こうわたしに話しかけた。同時にわたしは心の中にありありと其処を思い浮べた。あの蕭条しょうじょうとした先生の書齋を。

「寒かったろう。」

わたしは何か興奮の湧き上って来るのを意識したが、何分か沈黙しんもくの後、W君は又話しかけた。

「あの末次平蔵すえつぐへいざうですね、異国御朱印帳しらすを検べて見ると、慶長九年八月二十六日、又朱印を貰っています。……」
わたしは默然もくねんと歩き続けた。まともに吹きつける埃風の中にW君の軽薄を憎みながら。

日本文学電子図書館

「芥川龍之介随筆集」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

2014年3月14日 第1刷発行



日本文学電子図書館